

# Humankind: A Hopeful History by Rutger Bregman 2020

橋本 大也 HASHIMOTO Daiya

デジタルハリウッド大学 教授  
Digital Hollywood University, Professor

著者はベーシックインカムを提唱し「ピケティに次ぐ欧州の知性」と呼ばれるオランダの歴史家。大学に所属せずオランダの独立メディア「De Correspondent」所属の研究者として仕事をしている。昨年は招聘されたダボス会議で世界の億万長者たちに、あなた方はフィランソロフィーなど議論していないでちゃんと税金払いなさいと言い放ち、世界中から喝采（と批判）を受けた次世代オビニオンリーダー。

この本のメッセージは「他人はまともで親切だと信じればすべてが変わる」というもの。

こんな思考実験から始まる。

飛行機が緊急着陸して機体は3つに割れた。乗客室は煙で一杯で、誰もが「ここから出なければいけない。私たちどうになってしまうの?」と思っている。

あなたはどちらの惑星にいますか? :

惑星A: 乗客は隣の乗客に大丈夫ですかと尋ね、介助が必要な人たちが先に飛行機から出るのを手伝う。人々は赤の他人に対してさえも自らの命を進んで差し出す。

惑星B: 誰もが取り残された自分のことを考える。パニックが発生する。押し合いへし合いになる。子供、老人、身体が不自由な人が倒れて踏まれる。

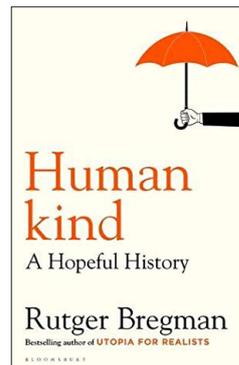
現代資本主義、民主主義、法体系はすべて人間は利己的だという惑星Bの世界観で作られているのだとブレグマンは言う。この考え方の元祖ホブズは自然状態では「万人は万人に対して狼」、「万人の万人に対する闘争」と仮定した。だから人は社会契約によって国家権力（リヴァイアサン）を作り、秩序ある社会を作る必要があると考えた（逆にルソーは人間の善い性質を信じた）。アダム・スミスは経済合理性で行動する人間（ホモ・エコノミクス）を資本主義思想の基礎に据えた。マキャベリは政治において目的のために手段は選ばない君主論を説いた。ダーウィンは弱肉強食の自然淘汰を生物の進化原理とし、ドーキンスは人間は遺伝子レベルから利己的だと結論した。

ブレグマンは私たちが惑星Bにいるとする現代の学説をリストアップしてひとつずつ論破していく。広く知られている学説が最新の研究で否定されていることを知らしめる中盤が知的に痛快だ。この30年くらいでいろんな分野の教科書が書き換えられているのだ。昔、勉強した人ほど誤解していることがある。

たとえばフィリップ・ジンバルドのスタンフォード囚人実験はヤラセであり看守役が状況によって残忍化したという事実はなかった。有名なスタンレー・ミルグラムの電気ショック実験もまたウソであった。上官に命令されたら人は残忍なこともためらわないという結論とはほぼ反対のデータが出ていた。

1964年ニューヨーク郊外の住宅街で起きたキャサリン・ジェノベーゼ殺人事件では他人に無関心な人間による見殺しなんて起きていなかった。人間の性悪説の根拠となっていた学説が崩れ去っていく。そしてブレグマンは、進化の過程では他人に親切な人だけが生き残ってきたのだから、人間の本質は善であるはずと主張する。

人間に対する悲観主義は予言の自己成就を招く。人間は周りの人間に信じてもらえていると思えば利他的に動くが、信じてもらえていないと思えば利己的に動くことが多くの実験で証明されている。だから重要なのは「右の頬を打たれたら左の頬を差し出す」ような非相補的行動（non-complimentary behavior）であり、empathy（他者への切実な感情移入）でなくcompassion（行動の伴う思いやり）である。率先して「他人はまともで親切だと信じればすべてが変わる」のだと言うブレグマンの主張は、危機の時代を生きる私たちを勇気づける。



『Humankind: A Hopeful History』  
Rutger Bregman 著  
発行：Bloomsbury Publishing PLC